

家庭経済の変動に関する生活史的研究

F-35

Ⅱ 生活実態調査—福島県農山漁村地区を例として—

1 家庭経済の変容 (1) 家文書による消費構造の経時的分析

2 その他の基礎的生活費 ○宮城学院女大 横山ミヅ 岩手大教育 後藤和子

目的 1)につづき本報では基礎的生活費のうち被服費 住居費 光熱費を中心に分析、考察した。

方法 1)に同じ。

結果 K家の被服費の内容から衣材料の自給状況を見ると、その種類 量は僅少で明治末期から大正初年に至る数年間、自家生産の繭から糸とり、機屋、染屋の糸を経て家族の暗着用の衣類を調製しているとともに、くず繭から真綿を作っている程である。一方和服の調製は布地と縫製に必要な材料を購入し、その殆どを自家縫製している。既製衣料の購入は男物外装用のトンビ、裏毛メリヤスシャツ、上着、ズボンの順に主として男物衣料から着用され、次第に金額も増加している。被服費支出の推移を年次別に検討すると、家計費のなかの被服費の占める割合が15%を越える場合は子女の婚嫁、孫の出産祝など家族周期に関連があることがあきらかである。住居費支出においても、平年の家屋修理、厨房器具の補充にあてる金額は5%以下の低率であるが、冠婚葬祭とくに時期を予定し得る婚嫁、法事などに際しては墨替、食器補充などの支出が集中的に行なわれている。つまり農家の消費構造は衣、食、住ともに日常の家族生活の必要最低限を満すにとどめ、冠婚葬祭の晴の日の準備のために重点がかかるという仕組みである。光熱費のうち自給されたものは炊事、煖房用の薪木のみである。大正9年に電燈が導入されたことにより、ランプ用の石油購入に代り、電気料の支出の大幅な増大がみられる。